

酒巻和男氏の講話

久保 陽 (74期)

これから紹介する酒巻和男氏 (68期 平成11年11月29日死去) の手記は、講話の草稿で、偶然入手したものである。

74期の大半が還暦を迎えた昭和60年、丸の内界隈に勤務するクラスが中心になって「丸の内木曜会」と称する昼食会を始めた。その席にお招きした先輩の海軍談議が頗る好評で、21世紀に入るまで16年も続いた。お陰でその間に、延べ100名を超える諸先輩方とのご交誼が得られた。

幾度か死線を越えての実戦体験を始め、時には古き良き時代のよもやま話、或いは海軍消滅後の人生談議など、その都度感慨深く拝聴したものである。ただ、もともと身内の会なので、講師には自由に気楽に喋って貰うため、内容については一切記録に残さないことにしていたが、今から振り返ると、誠に残念なことをした思いである。

丁度この会が軌道に乗りかけた昭和61年11月、第22回の例会は、同期の茂木明治氏のご尽力によ

り、酒巻和男氏の招聘が実現出来た。ブラジルから帰国されて間もない頃で、多忙な中を名古屋からわざわざかけつけて下さった。特異な体験をされた方の参加とあって、当日は興味ある話を期待して最高の出席者で賑わった。然しこの時も各自の胸の内におさめるだけで事情は変わらなかった。

ところが散会后思わぬハプニングがあって、講話の草稿を手にした。原本は、新聞などの折込み広告10数枚の裏面の白紙を利用してぎっしりと克明に書き込み整理されており、改めて講師の誠実な人柄とこの講話に臨む熱意・真摯な姿勢に感動を覚えながら、早速一読したところ、内容は多岐に亘っており、当日一時間余りの限られた時間内では、とても全部に觸れるわけにはいかず意を尽くせなかったことは明らかであり、ご本人もさぞ不本意であったろうと推察され、我々もまた非常に心残りであった。それだけに、この貴重な資料



前列中央
神田中尉 (67期)
17・3・2 殉職

後列中央
酒巻少尉 (68期)

右端
横山中尉 (67期)
16・12・8 眞珠湾

16・6 三机
岩宮旅館

は、何れ機会をみて公表せねばなるまいと心に決めていたのであるが、何分にもオフレコでしたし、断りなしに公開するのも憚られ、気になりながらも今日までずっと手元に暖めた俣の結果となってしまった。

今回はからずも、この草稿が記念誌編集委員会で取り上げられ、陽の目をみることになった。永年持ち続けていた心の蟠りが払拭された上、掲載するに当たって、種々ご配慮賜り改めて厚くお礼を申し上げる。

尚、手記はすべて原文のままであるが、紙面の都合で一部割愛させて頂いた。

A. 眞珠湾戦について

酒巻でございます。木曜会の皆さん、戦時中そして戦後たいへんご苦勞さまでした。

1. 特潜特攻隊

さて、私は開戦劈頭眞珠湾攻撃に参加しました。私たちの特別攻撃隊は、2人乗りの特殊潜航艇、いわゆる特潜5隻であります。特潜は長さ24m、高さ3.4m、幅1.85m、排水量46ton、攻撃装備は魚雷2個、電池で走りますが、全速力24節、最速4節の超小型潜水艦です。航続距離は高速で20浬、経済速力で100浬、従って日本からハワイまでの4000浬は大型潜水艦に搭載して行きました。この大型潜水艦を母艦と言いますが、私の所属した母艦はイ24潜でした。皆さんが先般この会へお迎えした鹿島建設の山本康久先輩(67期)が砲術長でした。

11月18日、呉軍港出発、ハワイへ直行しました。12月8日の丁度20日前です。

小笠原群島を越えると、もはや日本の領土、制海制空権内ではありません。絶対に見つからないよう、水中潜航の隠密行動になります。11月20日午後私は遠ざかり消え去ろうとする小笠原に向かって、思わず敬礼をしていました。いよいよ私の生まれ育った日本への最後の別れになるかもしれない。よし、日本の発展のためにこの日本を守るために、「俺はやってやるぞー、たとえ眞珠湾の海底の藻屑になろうとも」というファイトの盛り上がりで一杯でした。と共に「日本よ、いついつまでも栄あれー、さようならーさようならー」という万感胸に満ちた敬礼でした。

しかし、世の中というものは、なかなか理想通り思うようにはゆかないものであります。小笠原

からの4年余り私は何十回となく生死の瀬戸際にも立つというか生死の間をさまよいましたし、デモクラシー・アメリカを嘗める破目にもなりました。そして眞珠湾で言わば大きな十字架を背負った恰好にもなって今日に至っております。

戦後日本に帰りますと、ジャーナリストや世間から色々聞かれますし、誤解や噂で関係者に迷惑をかけては誠に相済まないのので、昭和24年に「眞珠湾から帰国まで」の事をまとめまして単行本にして世に出しました。アメリカの方は、内容はアメリカ人向けに少し変えましたが。

何れにしても、戦時中のことで常識では理解できない機微な事もございます。従って私の気持ちとしては「敗軍の将、兵を語らず」というような気持ちであって触れたくないのでありますが、しかしそうもゆかないので、これから断片的に触れることにします。

2. 悪戦苦闘

12月6日、私の艇のジャイロ・コンパスが全然動かなくなりました。特潜は新秘密兵器で、相当機微に出来てはいますが、コンパスがないと水面下を走る特潜としては、全くの盲目になります。艦長も非常に心配されて「どうするか」と聞かれましたが、今更やめる訳にもゆかないので「行きます」と答えて発艦しました。そのとき艇付も「ついて行きます」と言ってくれました。私は、博多沖の元寇の時、帆柱を倒して敵艦に斬りこんだ河野通有の姿を思い浮べておりましたが、発艦は12月7日夜11時頃、眞珠湾口外約10浬です。私たちの計画は開戦時刻、すなわち8日の日の出までに湾内に入って沈座し、開戦時刻後に港内の敵巨艦を攻撃して集合地点に帰り、8日夜に母艦が収容するということでした。

母艦を離れて、モーターをかけますと、ピューと水上へ飛上りました。ツリムが大きく狂っていたからです。開戦前の敵の直前です。見つければ全く大変な国際問題になります。細部省略しますが、全く命がけの長時間かかるツリム修正でした。何とか飛上らないで動けるようになったときには、もう8日の日の出を過ぎていました。

湾口には2隻の駆逐艦が左右に警備の監視航走をしていました。このラインを突破することが次の問題です。ところがコンパスなしで舵中央のまままで走るのですが、艇は真っ直ぐには進まず必ず

カーブしてゆきます。だから次に潜望鏡を上げてみると全く逆の沖の方へ行っていることも再三で、全く盲目滅法の迷走です。露頂を多くしながら警備艇ラインに近づきますと、すぐ爆雷攻撃を受けました。結局何回も突っこみ何回も爆雷を受けたのですが、第2回目直撃に近い最至近爆発かと思えます。艇は大きくもんどりうち、二度も三度も激音があり内部被害で煙が出ます。人間も頭や腰を打って倒れもしました。やられるとすぐ深く沈んで少し避退し被害状況を調べたり修理をします。

その頃、とっくに開戦時刻を過ぎていましたので、潜望鏡で湾内を見ますと、大黒煙がすさまじい勢いで真直ぐに上り、そして右へホノルルの方向へ横に流れていました。「やったな、航空部隊は」と言って艇付にも覗かせ「よーし、わしらもやるぞ」と肩を叩いた。駆逐艦は全く眼の前で白い服の水兵が甲板を右往左往するのがよく見えました。駆逐艦を倒すのは至極簡単ですが、私たちの狙いは湾内の空母か戦艦でした。

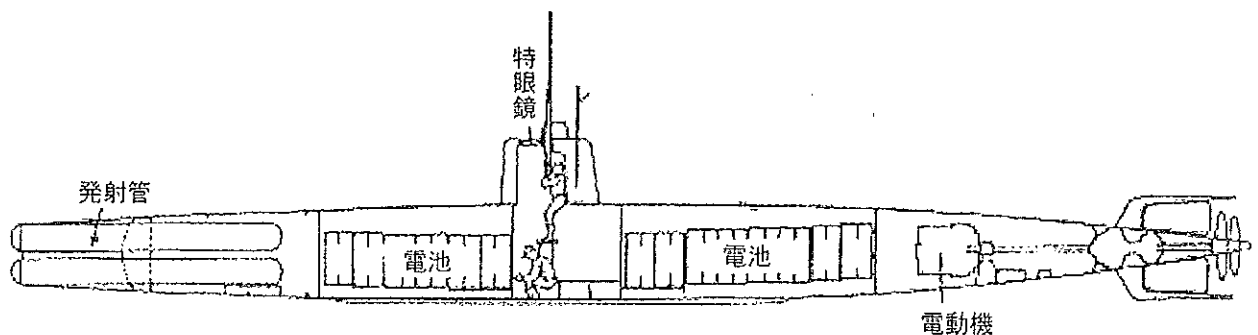
この湾口駆逐艦ラインを突破し得たのは、結局8日の午後でした。そして湾内目指して走ったのですが、今度は湾口のリーフ（さんご礁）に坐礁しました。これはコンパスなしの盲目航走と湾口の形状が複雑なためです。後進をかけて離礁するのですが、後進をかけて退ることが、出来た場合もあるものの何回かは後進をかけても動きませんでした。また前のバラストを後へ移動です。敵艦の直前で姿を現わしたまま、生命がけでの時間がかかる修正です。今度は爆雷攻撃が出来ないので、沖の方から陸岸近くの私の方へ砲撃です。

艇内は悪ガスが充満し、気圧も2000耗で人間の生存限界状況が続きますが、とにかく離礁して調べますと、何回目かの離礁時ですが今度は魚雷の

発射装置がいかれて、どうも発射できないと艇付が言います。8日の午後、何回も突入を繰返したが結局途中で座礁するので艇付が「シンガポールにしましょう。今度はコンパスをよく整備しますから」と言い出しました。シンガポールというのは私たちは眞珠湾の次はシンガポール行きになるだろうと専ら話し合っていたからです。私は「それはいかん。とにかくもう1回突っこむぞ」と言った。もう夕方頃です。「今度駄目だったらシンガポールにしますか」と艇付がいいいます。攻撃能力が無くなり敵艦へ体当たりしようにも盲目で近づく能力がない。次の使命があるし、優秀な艇付を無駄に殺してもいけないとも思った。「うん、やむを得ん、そうするか」とつぶやき回頭をして突入を始めた。最後の突撃もまたコーラルラインにひっかかり、集合点に向うことになった。

もう夜ふけになっており、ハッチを開いて空気を吸った。大気がたいへんおいしかったし、身体中が頭の芯までスーと冷却水を浴びたように清らかにしびれて、フラフラと倒れて寝こんでしまった。2人交互になったとは思いますが、倒れこんだ。月が出て薄暗いが空は晴れていた。

集合点はラハイナ島の南西端です。9日夜明け近くに島影が見えた。ラハイナ島とモロカイ島の間に来たと思った。そして放電しつつして座礁した。岸は近くのように見えていた。艇の爆破薬の導火線に点火して外へ出た。先に飛びこんだ艇付は泳いでいたが、次第に見えなくなった。私は最初泳いでみたが、泳ぐ力もなくなっていたので、仰向けになって浮身をした。そしてそのままになってしまった。どうも磯波で打上げられたか、無意識に手を動かしたのか分らないが、はっと気がついた時には岸辺で米兵に両腕を支えられていた。



甲標的概念図

3. 邦人秘話

米国に拘留されてから、現地で拘留された邦人と一緒に収容所にいました。その邦人で真珠湾戦を山の上から見た人から直接聞きましたが、8日の朝、沢山の飛行機が真珠湾上空にやってきて低空飛行に移る。「最初は演習だと思った。しかも今日は、素晴らしく真剣味のこもった見事な演習だと感心した。そのうちに真珠湾が燃え始め、眼前に飛び上る飛行機に「日の丸」がついていた。「こりゃ日本機だ。戦争だ。日本がやったぞ」と気がついた。

午後になって湾口の方を見ると、気が狂ったのか海上の軍艦が自分の国の海岸へ向けて砲撃していた。という話しでした。これは私の艇を目がけて発砲していたもので時刻と場所から断定できませんが、結局命中弾はありませんでした。これは、あまりに水平で近いので、艦の大砲では俯角が効かないし、目標が小さいので命中しなかったものと思います。

邦人の話では、8日の夜にアリゾナの大爆発があり、アリゾナのとどめになりますが、これは特潜による唯一的な実戦果であります。8日の夜は「日本軍がオアフ島の裏海岸に上陸した」などのデマが市中に流れ、ホノルルも真珠湾の方も全く戦々きょうきょうの混乱振りだった、という話しです。

4. 慢心自滅

また米国側の記録にあり、邦人たちから聞いたことですが、12月7日夜半から8日の早朝にかけて「どうも怪しい推進器音が聞こえた。変な小さい怪物のようなものが海面に現れ消えた」という報告が、警備哨戒艦から見張管制所へ届けられた。これは私の艇を含め私たちの特潜が探知されたものです。ところが「そんな馬鹿な事はない。それは気のせいではないか、まあ、そうムキになるな」と上級将校にせせら笑われた。再三の真剣な報告なので見張り管制所長は軍港司令官などトップへ届けたが、寝込みを襲われて結局似たようなことで応急措置がとられないまま、開戦となり日本機の攻撃になってしまった。

丁度これと同じ様な事が、その後、日本でも起っています。昭和17年4月18日のドーリットルの東京空襲です。漁船を改造した監視艇が北海道の南東洋上で哨戒していました。そこへ米国の機動

部隊がやってきた。小さい漁船の監視艇はすぐ突っこんだが撃沈されました。しかし電信員は身体が海中に沈み没するまで、基地へそして東京へ機動部隊の兵力、編制、日本へ向う動向などを電信し続けました。

この電信員たちは結局米軍に救助され捕虜として私のいる所へ来て、涙ながらにこの話をしました。しかし東京では「そんな馬鹿なことがあるか」といわんばかりで、どうやら早急な対応措置をしなかったようです。

監視艇の報告からは相当に長い時間があつたので、すぐ措置すれば一方的な空襲にならず、すぐ反撃機を飛ばして敵空母の撃沈も可能であつたのに、と私たちも地団駄を踏みました。

この監視艇の事があつたので、米国の機動部隊は予定を変更し、攻撃機を予定より早く発艦させ、機動部隊も早く反転帰港するし、空襲機は母艦への帰投をやめて、中国へ着陸することになりました。

その頃の日本は、勝ち戦の連続で提灯行列に湧き慢心というか油断というか、おごり高ぶりがあつたようです。全く油断大敵とはこのことで、心の慢心、いわゆるおごりは自分を自滅させるものであります。ミッドウエー戦にも同じ事があるようです。

5. 流れの変化と新兵器

このミッドウエーを境にして、戦局の流れは変わってしまい、到頭最後まで流れを変えることが出来ませんでした。戦いの攻守が逆転したガダルカナルのヘンダーソン飛行場の戦闘で倒れ、収容所へ来た者から、「ほんの紙一重で勝てたのに」という涙の話しも聞きました。日本軍の健闘にも実に素晴らしいものがあります。従って私の体験から言っても「生死勝敗は紙一重」という実感であります。

しかし、日本の敗因には、心のおごりなどの精神的なことや、時に利あらずという運命的な問題はありますが、やはり大きい要因の一つとして特潜に乗った者として痛感するのは独創新発明的な新兵器の開発力、科学技術力の差だと思います。

というのは、特潜は日本海軍の唯一的な新兵器でした。しかしこれでさえ絶対的優秀性・威力というには一寸心がひけます。これに反して、アメリカ側は最後が原爆によるとどめになりますが、

レーダーを始めとする沢山の新兵器をタイムリーに開発し活用しました。

私たちは $F=MV^2$ （戦力は兵器でなく精神力の二乗に比例する）とか、戦力は兵力の二乗に比例するから「緒戦に勝った者は勝つ」とか色々と言われ習いましたが、やはりテクノロジー、頭脳力の差だと思いました。そして終戦です。

B. 極東軍事裁判について

1. 終戦時の状況

終戦の時は、私はテキサス州のケネディ・キャンプという収容所にいました。終戦後、暫くたった或る日、私は独房へ入れられました。独房というのは、いわゆる重営倉で牢屋牢獄です。その日はたまたま暑くハンカチが汗でびしょり濡れたので、洗面所で水をかけてゆすぎました。これを番兵が見たのか、「洗面所で洗濯した。洗面所での洗濯禁止という規則に違反した」という理由です。もちろん「敵は本能寺」の理由ですが。

独房入りは再三再四経験していましたが、コンクリート土間二畳位、鉄ベッド1個、毛布1枚、枕1個、後は鉄の壁と鉄の格子です。収容所長が来て「戦争が終り、君以外はいずれ日本へ送還する。しかしお前は、永遠にこの牢の中に居り、朽ち果てて此処で死ぬんだ」と吐き捨てるように言った。

そして、これみよがしに私の鼻先で煙草を一本吸ってはプイと捨て、チョコレートを半分かじってはポイと投げ棄てた。最初の一昼夜は飲食物は何も与えられません。二日目からはパン1個と水またはコーヒー一杯だけで、それが毎日続きます。誰でもやせこけて眼が凹み衰弱してゆくのですが。

その時、その収容所には日本陸海軍の士官・下士官の全員、数百名がいました。同期の作家・豊田穰も一緒ですが、一応全員私に何等かの世話になっていますが、私が一緒に日本へ帰れないかもしれないと、たいへん心配してくれたのですが、結局は皆さんと一緒に日本へ帰ることが出来ました。

2. 弁護人として出廷

帰国は昭和21年1月ですが、或る日、私は呼出しを受けて、極東軍事裁判に出ました。被告ではなく弁護側証人としてです。連合軍の捕虜を虐待

したということで、日本の捕虜収容所の所長や関係係が、戦犯被告として裁判にかけられていました。検察側が一方的に日本は悪いというが、アメリカにだってこんな事があるという弁護証言をするという計画でした。

米国の弁護士には、聞かれるままに私の体験を話しましたが、表面はともかく現実には虐待とか先程の入獄とか、そんな生やさしい類の事ではないかもしれません。戦後40年以上ですが私はまだ何も世間に言っていない。或いは私が死ぬまで公言できないかもしれません。私は黙って辛抱しています。

そして実際の法廷では、私が証言台で一言云い始めると、裁判長から「それは国際問題になるから」ということで発言を停止され退廷しました。翌日の新聞には、弁護証人として私が出廷したとのみ報道されました。

3. 戦犯裁判と板東収容所

極東軍事裁判と言ってもやはり「勝てば官軍、負ければ賊軍」になってしまいます。私の同期生にも江田島で私と同じ分隊で人間としては良い男なのですが、たまたま一時的に捕虜収容所にかかわったので戦犯として死刑になった者がいます。

第一次世界大戦時に青島で日本軍の捕虜になって日本の板東収容所で素晴らしい取扱い待遇を受けたドイツ人は、60数年後の今日でもなお感謝の交際をしています。日露戦争の時も似た様な事があったようです。日本が勝った時は一生感謝され日本が負けた時は死刑です。まさに雲泥の差、それ以上の差ですね。だから、やるべきではないのですが、やるからには勝たねばならないのであります。

C. 米国の世界戦略と日本の偏向について（敗戦後の日本の中で）

1. 真珠湾の謀略

勝つための方法 — 何も戦争や闘争に限りません。企業だって何だって同じ様な事です。孫子の兵法では、戦わずして勝つのが上策。戦うのは下策ですが、先ず己を知り、敵を知れば百戦して殆うからずであります。

従って世界各国の政治家や軍部は、戦わずに自分の国が発展し優位にたつて勝つように、10年、50年、100年という長期的な政略・戦略というか、

謀略・国策を絶えず練って、言外の実力をほのめかしながら、宣伝・情報に努めるのが常道であります。特にアメリカの謀略・世界戦略というものは極めて巧妙且つ強力ですが、これに関連した話をしたくと存じます。

私は米国に収容されて間もなくの頃ですが、米国土官と口論したことがあります。下手すると一発で殺されますが、この事は米国側の記録に基いて書いたというオーストラリアの戦史家ベギー・ウォーナーさんの著書にも出ているようです。

米国土官が私に、「日本は真珠湾をダマシ討ちした卑怯者である。ダマシ屋の悪者である」と言います。そこで私は「米国は、満州や中国から日本軍の全面撤退を要求するハルノートを突きつけ、石油などの主要資材の貿易をストップする経済封鎖をしたではないか。これでは“立ち上がるか、しからずんば死あるのみ”になる。そういう風に米国が謀略的な仕掛けをしたのではないか。そして“不意討ち奇襲”されたからと言って“ダマシ討ち”というのは、戦略戦術を学んだエリート士官らしい言葉ではない。戦争という非常事態では、一見ダマシ討ちのような奇襲作戦も当然にあり得る戦術の常道ではないか」と反論しなりました。戦前に上からも聞き本でも読みましたが、戦後に米国側の発表でよく分ったのですが、米国は第一次大戦後のワシントン軍縮会議の時から対日戦争計画オレンジ作戦を始め、昭和5年のロンドン軍縮会議以後は、徐々に具体的な政略・戦略として進められ、昭和16年の秋には日米双方とも、いつどこで戦闘になるか、両国共に準備を整えて、いわゆる間合いをとって睨みあっていました。

従って先に奇襲したとか、しないとかいうのは「戦略戦術的にはナンセンス」でありおかしい。米国側も、だから太平洋艦隊を真珠湾へ集めていたわけです。私は現地の邦人から直接聞きましたが、アメリカは開戦と共に予め作っていたリスト通り邦人を収容し、敵性度判定については、天皇陛下のお写真を「踏み絵」として使用したところもあります。

極東軍事裁判、A級戦犯絞首刑の理由の一つに、戦争開始の責任、真珠湾ダマシ討ちの責任ということがありますが。このとき印度のパール判事のみは、「いかなる弱小国でも、この挑戦を受けて宣戦しない国はあるまい」と述べました。ということ「米国が難題を出して日本を困らせ、戦争

を始めざるを得ないように追いこんだのではないか」ということです。

ルーズベルト大統領は、「リメンバー・パールハーバー」（真珠湾を思い起こせ）というキャッチ・フレーズで、国民の士気を鼓舞しました。しかし戦後になってですが、世論の国アメリカ、デモクラシーアメリカが戦争を開始できるように、開戦の口実になるように仕組んだ謀略だという軍事評論家が日本やアメリカにいます。昭和36年に私がパラグアイの海軍高級将校と話しあった時も、彼は同じ見解であり、海軍将校としては常識的な事だと言いました。他の外国人でも同じ事を言う人があります。

私に言わせれば、そんな事を論争するのは笑止千万な喧嘩両成敗なこと、水掛論であります。戦争に負けたから仕方がないというのは、一方的に日本が悪いと教えられ、信じこまされているのは誠に情けないことです。それ位ならまだよいのですが、アメリカがいうことはすべて正しいのだと言い張る人さえいる昨今です。眠りから醒めて真実をつかんで欲しいと思いますが。私はブラジルの桜花会でもこの事を言い続けました。

2. 敗戦後の占領政策の推移

戦争に負けた国の実状を戦史的にみても誠に哀れなものですが、同じ負けるならアメリカに負けて良かったと思います。しかしそのアメリカでも、アメリカの都合の良いように日本を料理してゆくのは当然かと思えます。日本をアメリカの謀略、占領政策通りに転換させることです。もちろんヤルタ会談やカサブランカ会談などで「日本をどう料理するか」について基本的な打合せをしていますが。どの戦争でも似た様な常道ですが、先ず日本を二度と立ち上げないようにすること、それが第一の狙いになります。そこで占領軍の指導に基いて、新憲法を作らせ、その第9条で戦争放棄を、そして教育基本法などで骨のない日本人作りをと考えるのが普通であります。とにかく、好むと好まざるにかかわらず、負けた日本としては、それに従わざるを得ません。

ところが、日本にとってラッキーだったのは、戦後に米・ソ二大陣営の対立・冷戦になったことです。そして昭和25年の朝鮮事変の勃発で、米国は「日本を弱体化し過ぎてもいけない。或る程度の実力をつけさせて、日本を対ソ防衛の第一線に

役立てなくてはならない」という必要に迫られました。そのため、昭和25年には警察予備隊（後の自衛隊）が生まれ、そして現在でもその増強が要求されております。

私は戦後、昭和22年にトヨタ自動車へ入社しましたが、工場の入口には「賠償指定管理工場」の門札がかかっており、中国へ移転させられるかも知れないと噂されて動揺していました。だから私のようなものでも入社できたのでしょうか。しかし朝鮮事変後は、アメリカは日本の工業力・企業力の培養に注力しています。デミング博士によると品質管理法（QC、TQC）だとか、監督者訓練法（TWIなど）などを日本に指導し、何とかして日本の工場への力づけに配慮しています。そして日本自身の努力もあって日本は「出藍の誉れ」の力をつけてきました。

私自身は、当初人事部人事課ですが、25年の労働争議反省からトップへ「従業員の人間作り」教育制度の提案をし「それならお前が担当してやれ」ということで、従業員教育の仕事をやりました。従ってアメリカからの訓練手法については、相当に勉強もしました。

ともかく、米国の核の傘の下で、軍備費は極めて少く、ただ金儲けをする産業活動に専念するという恵まれた条件が続きました。これでは経済成長をするのは当たり前です。そして日本は、経済大国に成長しました。

3. ブラジル社長会と戦史から

私は昭和33年から輸出課長として、本格的な輸出開拓と増強に取り組みました。世界各国へも行きました。そして昭和44年から58年にかけて満14年足かけ15年間、ブラジルトヨタ自動車社長をしました。

ブラジルでは、VWがトップメーカーで、アメリカのBig3やBENZなどが、これを追っています。自動車業界の基本問題については、社長会で最終決定をします。或る時、日本のN社が現地へ進出し自動車製造会社を作ろうと、その準備に努め工場建設予定の或る州との関係では目途がたちました。しかし最終的には国の許可が必要です。国は業界の意見を徴して最終決定をしますが、この時の社長会におけるGM、FORD、VW社長たちの発言は「N社が出てくると、自分たちが困る。要はN社が出られないようにするだけだ。それには、

出る場合には底なしに巨大投資がかかるような難題条件を乗せればよい」と言った。まさに何時もは言わないホンネです。

私が居る前で露骨な条件を提案し可決しました。そして「日本が世界の各市場で暴れている。要は日本を困らせ日本を弱くすればよいだけだ」とも明言しました。まあ、それが本心、ホンネでしょうが。通常の場合は表面的には極めて紳士的で美辞麗句的な話し合いであり、つきあいが良いのですが、やはりいざとなると、ホンネがむき出しになります。

また、日本で事あるごとに、心ある外国人や現地の日系人からよく忠告的な質問をされました。「なぜ日本では国旗をかかげ国歌を歌うことに反対するのか」。「なぜ常識を見失って理想だけに走るのか」。「なぜ人なみの自衛力を持ち、備えあれば憂なしにしないのか」。

今の調子が続けば、日本の将来が危ない。早く独立国らしい独立国にならなければ」という類のことです。

私は海軍兵学校で「戦史」を学びましたが、その世界戦史からみましても、数千年という人類の歴史は、言わば戦争を繰返しながら発展してきたという栄枯盛衰の歴史であります。人類も所詮は地球上の生物で、生物（生きもの）には生存本能、闘争本能がある。もちろん闘争や戦争というものの形態は科学技術の発展・時代の変遷で変わります。核時代を迎えて、従来のような形態の戦争はあってはならないのですが、形が変わった闘争はあり得るし、相手が仕掛けてくれば守らざるを得ない訳です。こんな簡単な常識的な事が、なぜ日本で通用しないのか、なぜ日本人に分からないのか、というお叱り的なアドバイスです。

戦争をしたい人は誰もいません。戦争は犠牲をとれない全く悲惨です。だからと言って戦争放棄も、無闘争、平和のみを唱えたからと言って平和が一方的に続くというのは、単なる理想です。現実にはそうは問屋が卸しますか、そんな一方的な考えは甘過ぎるし誤りではないか。学校にいじめが皆無にならないように、やはり人間社会は十人十色であり、力の強い者は力の弱い者を狙うものです。むしろそうした無気力、無力という力のバランスの崩れが闘争や戦争の原因となることは歴史が示しています。若し力を放棄し、実力を備えないもの、そんな民族や国家があるとすれば、そ

れこそ良い鴨であり、子羊ではないかというアドバイスです。

4. 歴史の仕掛人と偏向是正

昭和58年、私は定年も過ぎていましたので、帰国を命ぜられトヨタ自動車を定年退職しました。そして傍系会社の豊田総建の社長を命ぜられ、やはり年令もあって、現在は顧問であります。

日本へ帰って驚いたことに、世代の交代が進んでいるということがあります。戦後の教育を受けた人が、校長になり、社長になるような時代に移っています。この15年の間に私の人的ネットワークも薄らいでいました。私の知らない人が実権を握っています。高度成長はしたが、心のない物と金の盲者世界という感じさえします。それも歴史的にみて、米ソの対立という国際関係の幸運に恵まれた言わば「一時的成金」に過ぎないかもしれないのに、「自分たちに実力があるんだ」という自惚れ的な偏見・偏向があるようです。本当の骨というか、忍耐と努力の強さが特に飽食時代に育った人に懸念されました。

私たちはよく歴史をふり返り、正すべきは正し、偏向は是正しなければなりません。歴史は実力者によって動かされています。コロンブスのアメリカ大陸発見後、先ず世界を制し動かしたのは、航海術にも長じたスペインやポルトガルでした。18世紀は農業生産力を高め、ナポレオンも出現したフランスでした。しかし1805年、トラファルガル海戦でネルソン提督の英国艦隊がフランス艦隊を破ってから、19世紀はイギリスでした。工業力を持った大英帝国が世界を制して、日の没するところなしになりました。

しかし20世紀、今世紀になってからは、重工業力ヘビー・インダストリーの力で世界一となったアメリカが、特に1941年大西洋憲章と共に世界のトップリーダーになりました。「おごる平家は久しからず」と言いますが、世界のトップリーダーの交代歴史を振り返ると、その感が強いのであります。フランスやイギリスもトップになって栄華に耽っています。私はこの眼でみて来ました。アメリカも亦然りと言いたい様な状況が見えています。即ちアメリカが西部劇で見るとような開拓マインド（フロンティア精神）が強かった時代は実に素晴らしかった。しかし第二次大戦後に「アメリカの人心道義」に弛みというか頹廢がみられ、落

日の道を歩んでいます。

もちろん、未だ総合的な実力はトップであり、世界のリーダーであります。「飼い犬に手をかまれる」というか「出藍の誉れ」というか、日本の経済力に押され、「庇を貸して母家をとられる」ようになりかねないことさえあります。

しかし一方、日本の中を覗きますと、折角経済成長をしたのに、世代が交代して、アメリカの悪い墮落的なことを真似て、アメリカの悪と同じような現象が眼につきます。（麻薬・セックス・いじめ）これは41年前の敗戦に伴って、勝者の意向で180度的な転換したものの考え方、やり方に大きく起因していませんか。我々は戦前・戦中の事も体験しているので、仮に戦後の押しつけられたデモクラシーに無理なところがあっても忍耐しながらともかく日本の再建復興へと頑張ってきました。與えられ日本で理解しているデモクラシーが本物のデモクラシーと違う点が沢山あって、私自身も指摘したかったが、それを言う資格も権威も実力もないのでただ辛抱しました。皆さんもそうでしたと言えるかもしれません。

しかし世代の交代変更は40年50年というのが一つの目安的な年限でしょうか。戦後40年を過ぎ戦争や敗戦による実情を知らない人たちの世代に移ろうとしています。言わば世界も日本も大きな歴史の曲り角にさしかかろうとしています。まさに非常時であります。私はそしてブラジルの日系人たちで話し合った結論は、敗戦という特殊事情下に與えられた憲法や教育基本法などについて謙虚に是正しなければならない。その方向への努力をしなくてはならないということでありました。

5. 三転したアメリカの対日戦略

戦後アメリカの対日戦略は三転しました。占領直後は日本の弱体化、戦争を放棄して平和の念仏だけを唱える骨抜きにすること、朝鮮事変後は輸血強化です。ところが昭和30年代に経済成長したので、出る釘は打てということで、今度は経済戦争を含めて日本を叩く作戦へと反転したのであります。その作戦の場合は、やはり孫子の戦わずして勝つという上策です。それは出来る限り自分が表面に出ず、すべて身代りになり生け贄になる者に責任を、すべて罪を被せるという方法であります。これをscapegoat systemと言いますが。例えば、日本の現憲法も日本が作ったし、戦争を起こ

したのも日本だということにしています。経済摩擦・円高も一方的におしつけ、G5の決定・日本の決定だという体裁にします。フィリピンのマルコスからアキノへの政権交替もアメリカの筋書き通りですが、フィリピンがやったことにする。アメリカは素晴らしい情報組織網と遠謀術策の能力を持っていますが。更に言えば日本列島改造論を唱えて日本を急成長させた田中角栄はコーチャン発言で火を燃え上らせて叩きのめしたと外国人の間で笑っていた。日本を韓国などに牽制させるため、殆ど名古屋に決っていたオリンピックを突然ソウルにするなど、謀略・裏の根廻し、裏の裏まで読んだ作戦です。

ともあれ、日本はアメリカの保護国、属国であると言えます。表面的には或いは言われる通りしなければならぬでしょう。そして協調的に動かざるを得ないしそうしなければなりません。しかしその真意を見失わないようにしたいものです。

敗戦は、大きい歴史の流れの中における一つのやむを得ない転換でした。大きい波のサインカーブの一つでしょう。

今やそのヒズミが出てくるばかりか、押しつけられたものだけにそこに大きな偏向がありました。この偏向を認識反省しないで、即ち偏向を偏向と認めないでそれが正しいんだという偏向があることに強く固まりつつあります。

この偏向を是正してゆくことは何か大きな機縁(事件や事変など)が起らない限り、すぐには是正できない問題があります。しかしそうした方向へ努力をしなければならぬ事が高齢化した私たちに残された課題であり、責任ではないかと考える次第であります。

D. 国際化時代について

1. 国際化時代の到来

文明と交通の発展により、今や世界の片隅で起った事件や情報もすぐ世界中に伝わり、テレビで見聞できるし24時間以内に現地へ行ける時代になりました。時代は流れ変遷しています。

従って現在でもビルマやタイ、ブラジルやアルゼンチンの奥地では、鎖国的社会主義というか、「清く、等しく、質素に」をモットーとして、国際的交流、国際化への反対風潮がありますが、今や国際化してゆくことは避けて通れない道であります。

日本の構造体質上も、国際的な共存をはからなければならぬ。国際的な人や物や金などの交流をしない限り日本が生き残れないし、日本の発展も望めないのであります。もはや経済大国になり、経済面ではアメリカに代って日本がリーダーシップをとるようになりました。東海の日本から、世界の中の日本になりました。従ってこれからは、好むと好まざるとにかかわらず、日本は国際化しなければならない、更に水は高きから低きに流れますが、日本の中は人、技術、金、仕事、物などが高いというか過密というか、多いというか。胸苦しい生活のゆとりさがない方が高い状況です。

ですから、どうしても日本は国際化してゆかなければならぬし、全世界的にみても、人類の国際化時代だとも言われます。21世紀以後になりますが、更に人智が進めば、人類の地球化時代、更には宇宙化時代になろうかとさえ言われています。

明治維新後開国文明化の成長脱皮をした。敗戦で民主化への脱皮成長。我々は、この国際化時代にどう対応すべきか。孫子の兵法でいう、先ず己を知り、相手を知らなければなりません。とやかくと細かい作戦を論ずる前に、この基礎になる研究対応が肝要です。そこで日本自身のこと、外国と外国との比較に分けて話しを進めたいと存じます。

2. 自己観察と是正伸長

先ず日本自身をよく知らなければならぬのですが、一般に言えば案外に「うぬぼれ」が強い。過信や野心を生みやすい。単細胞で熱しやすく冷めやすい事は、前半に言った通りですが、これに関連し2つの事を申し上げます。第一は「遠近法の錯覚」ということです。これはアメリカのボールディング博士の説であります。人は自分に近いものを大きく見誤りやすく、遠いものは小さく見誤りやすい、ということです。

私はアメリカやブラジル、アルゼンチン等で「日本を知っていますか」と質問してよく話し合いましたが、案外に日本というのを知りません。というのは、彼等が習い使う平面の世界地図は、大西洋を中心にした世界地図であります。太平洋を中心とした世界地図は日本とアジアなどの一部でしょうか。従って、日本は世界地図の端の方に、赤い点々とした豆粒ほどの小島国です。中

心に画かれた大きい自国と比較して、日本という国は豆粒の小さい国だし、そこの背の低い日本人がそんなに偉いとか力があるようには思えない。そんな国の人に尊敬せよとか耳を傾けるような気持が起こらないようです。

ブラジルでは長年の日本移民との生活で、日本人というものを評価しています。「日本人は真面目で良く働く」と。これは逆に言えば「日本人は馬鹿正直で愚直だ。だからこれほど欺しやすい相手はない」とみられています。

これを露骨にブラジル人が私に言ったのはテルアビブ事件の時です。ハラキリやカミカゼ自爆突撃と同じで、日本人は単細胞性があるので、一寸おだてれば自分の生命まで投げて極めて危険な極端に走るキチガイである。御しやすい人種だと思われています。

戦後の日本人、日本にいる日本人は、金と教育を持っているので、必ずしもさほど馬鹿扱いにはしていません。しかし、見たところ身長も低いし、風采も別に大した事はないので、多くの一般外国人からは、豆粒の小国で欺しやすい力もない日本人ぐらいにみられています。

3. 相手観察と対応の洗練

次は相手というか、外国を知る事であります。外国が日本と比較してどう違うかを正しくつかまなければなりません。国の発展の基本要素として、国土、資源、人（数と力）と言われます。そこで、これについて、私の体験から比較しながら申し上げます。

先ず国土です。日本は狭い島国ですが、その七割が山であります。これに反して国によって差がありますが、平均的に言って三割が山であります。従って国土の有効面積は広い大国の外国が更に大きさを持つことになります。

「ブラジルや尖頭が見えて次の町」という事を、ブラジル内陸部を旅行して痛感しました。どういう事かという、ブラジル国内を走ってみると、広い農園が果てしなく続き、車で走って行くと、地平線の彼方にキリスト教会の屋根の頂上にある十字架の尖頭が見えてくる。更に走ると次第にその下の家が現れ、そして次の町になるということです。

地球が丸い事を、私は再三海上で体験しました。しかし日本では陸上で体験し難いのですが、外国

へ行くと、陸上で地球の丸さを体験する機会が多かった。「ブラジルや尖頭が見えて次の町」は、まさにこれを表現しており、如何に外国の国土が広大かを物語っています。

私が終戦時にいたテキサスのケネディですが、独房からは農園が見渡せました。トラクターで農地を耕耘していましたが、作付栽培するのは1/3の部分です。他は次年度作付用に土地を掘起こしたままにし、次の1/3は肥料になる草を生やしたままにしています。3年ごとに1回の農耕です。それだけ広いのですが、日本は耕して山嶺に至り、肥料と労力を重ねています。現在、日本の米が問題になっています。

ブラジルは日本の24倍の広さですが、このブラジルを北半球に持ってきますと、南はインドネシアのジャカルタ、北は和歌山県の南方になります。東を東京としますと、西はシベリアのバイカル湖。この間をすべて陸地にするとブラジルと同じ大きさになります。国土の大きさを比較しました。

次は資源です。ブラジルは1000億ドルの外債をかかえインフレで悩んできました。他事ながら私たちは大変心配していましたが、ブラジル人は案外に平気です。それは豊富な資源に恵まれているが、その資源を開発して国を発展させるための借金であったからでもあります。政府の高官は私たちに言いました。「1000億ドルの借金、それぐらいは開発中の金山の一部に過ぎないよ」と。

ブラジルのインフレはオイルショックで高まりました。石油資源はあるのですが未開発、潜在資源であって顕在資源ではない。私が行った時（石油危機の前）には、石油自給率が20%程度でした。石油危機と共に石油資源の開発に注力しました。現在の自給率は50%になっており、数年後には80%の自給率になる計画になっております。

蜜柑畑を通過して、蜜柑を取って食べても警察は泥棒として捕まえません。沢山取って袋に入れて持ち帰るような事をすれば、初めて蜜柑泥棒という事になります。持てる国と持たない国（蜜柑一つとっても泥棒になる国）は、この様な事でも推測されるでしょうか。

サンパウロ大学というのは、日本の東大のようなもので、明日のブラジルを背負う人材を養成しております。明日のブラジルのバロメーターです。私が行った頃、サンパウロ大学の学生数の占拠率で、日系人は13%から15%位でした。しかも日系

人は成績優秀でした。ブラジル国内の人口比でいうと日系人は0.7%なのに、それだけ日系人は教育熱心であり、二・三世も頑張っていました。ここにも日系人・日本人の優秀性があります。

日系人の前には、アラブ系の学生占拠率や成績が優秀でした。それが日系人に移ったのですが、最近では韓国系の学生が増し成績も優秀で、日本人は落ちてきたという様に聞いています。人は数と質を伴うものですが、やはり努力する者は向上し、おごり怠けるものは落伍してゆきます。これは経済界などでも同じですが、北中南米の経済界を握るのはユダヤと言われて、アメリカはユダヤで動いているとも言われます。東南アジアは華僑、アフリカは印度人が経済界を握っていると言われ、私も現地で実感もしましたが。

4. 不戦勝のために

戦後41年、最近の日本の状況はおかしくなってきました。内憂外患こもごも至るという感じさえします。内憂とは、敗戦による考え方、やり方の転換に含まれる偏向が、いじめとか詐欺商法とかにツケとして出ていますが、倫理道徳が基礎から落ちていることです。戦後の学校教育で仕込まれているので、その偏っていることを偏っているのではなく正しいんだと信じこんでいるという偏りがあります。

これは與えられた憲法、それに基く教育基本法に起因すると思いますが、この偏向を是正しない限り日本の将来は危いということになるでしょうか。急激な是正はできないが、その方向への認識向上と実施推進が望まれます。

外患とは日本の経済成長、貿易収支の大幅黒字などに伴って、国際摩擦、経済戦争とまで言われる事態になっていることであります。水は高さより低きに流れる如く、日本から海外投資・企業進出、移住が進んでいますが、海外での国際摩擦という問題が多くなると思います。

この内憂・外患ともに言わば国際化時代、新しい時代に対する我々の試練であります。私は、日本が生き残り発展して行く大きな節目であり成長脱皮の時代だと思えます。我々は明治維新で開国し文明化するという成長脱皮をした昭和20年の敗戦で封建性を捨てた民主化という成長脱皮をした。今や世界の中の日本として成長脱皮という国際化を成就しなければならぬと思えます。

この脱皮成長を孫子のいう不戦勝、戦わずしてかちとって行かなければなりません。国際時代に対応した日本人への脱皮成長であります。どの様な脱皮かは既に話した事に浮かっていますが、今後の実施推進段階で私共のトヨタ自動車での体験から、このようなことに心がけてはということをも2つ申しあげたいと存じます。

第一は、「なぜを5回以上、真の原因を」ということです。国際社会問題には、一般的な我々の日常問題も同じでしょうが、すべて複雑微妙なもので裏の裏があるかと存じます。問題の表面のみでとらえることでなく、なぜそうなったか、その原因は何かと追求します。なぜそうなるのかと答は、またなぜそうなるのかと「なぜ」を5回以上繰返して追求するのがトヨタ方式であります。「読書百ぺん意自ら通ずる」と同様に、なぜなぜと追込み、単なる原因でなく、真の原因をつかんで処置しなければ問題は根本的な解決になりません。

第二は「共存共栄、粘り勝ち」
闘争は力の均衡の崩れから発生します。日本と外国では国土や資源など構造や体質的に大きい不均衡があります。水は高さから低きに流れるので、日本に力が高まれば海外へ進出するのが自然かもしれませんが、ブラジルへの移民ということでは日露戦争後、昭和初年（5年前後）、昭和30年初めに多くなっています。

ブラジルでは「ブラジルを愛さない者はブラジルを去れ」と言われ、サッカー国際試合などがある時は、車で動く場合もブラジル国旗を振りながら応援します。そうしなければなぐり殺されるかもしれません。それ程に愛国の熱意に燃えています。国や民族との一体感が強い訳です。自分の個人生活だけが現在のままで豊かに続けばよいということで、アメリカ50州の一州になってもよい、ソ連の一部になってもよいと考えるようになっては、それこそ自分の生活もみじめに崩れまじょうか。私は戦前の台湾や韓国、インカ帝国の遺跡などみて、絶対に他国の支配下で民族や国家の真の発展は望めないと痛感しました。

確かに戦前の考え方、やり方には悪いところもありました。戦後の考え方、やり方のすべてが偏っているということでもありません。偏っているものは偏っていると謙虚に反省して正し、大義に

立脚した国際化時代という新時代に対応した新しい考え方、やり方に改めるべきだというのが私の持論であります。

日本が国際社会の中で共存共栄をはかってゆくには、相互理解を深め、信頼関係を強化すること以外にない。米国がこのところ力を落としていることを認めはしても総合的な力は依然としてあり、絶えず強い復元力を示していく国であることを知らなければなりません。やはり国際的な共同

歩調をとりながらも、国の構造体質をみきわめて、不撓不屈の接渉を進めて、平和裡に粘り勝ちをすべきでしょう。

戦争と平和に関連しては不戦勝、国際化時代に関連しては共存粘り勝ちを訴えまして私の話を終ります。皆様のご健勝ご活躍を祈りまして私の話を終ります。

(文責 丸の内木曜会)

